

特別寄稿

新型コロナウイルス感染症拡大状況下における 中高教職課程科目「教育の方法と技術」における 取組みと今後の課題

沼 田 潤

は じ め に

2019 年秋以降に中国・武漢から始まった新型コロナウイルス感染症は、2020 年に入ると世界中に広がり、多くの人々を苦しめることになった。日本も例外ではなく、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって、医療や経済に深刻な影響をもたらしている。ワクチンや治療薬の開発が進んでいるが、今もなおその終息は見えてこない。

新型コロナウイルス感染症拡大は、大学教育にも大きな影響をもたらした。対面で授業を行うことで感染リスクを高める密な状況ができるため、オンラインでの授業実施が一気に広がった。本学でも、ポータルサイトのクラスプロフィールを活用した授業実施が求められ、教員は試行錯誤しながらその準備に追われた。2020 年度前期途中から対面授業の実施が認められたが、全ての授業で対面式が実施されたわけではなく、実質は対面式とオンラインが並行して採用されるハイブリット型授業が実施された。文部科学省は対面授業実施を大学に求めているが、新型コロナウイルス感染症拡大に終わりが見えない状況においては、ハイブリット型授業が継続して実施されることになると考えられ

る。このような状況において、学生の学びの質を保障する授業を展開していく上で、2020 年度の授業実施状況を振り返り、課題を明らかにすることが肝要である。筆者は本学で中学校・高等学校の教員免許状取得を目指す学生が学ぶ教職課程を担当しているが、その中高教職課程科目である「教育の方法と技術」における取組みを振り返り、今後の課題を考えていきたい。

中高教職課程科目「教育の方法と技術」 の取組みと今後の課題

本学の「教育の方法と技術」は、3 年次から履修登録することができ、前期と後期にそれぞれ一コマ開講されている。教育方法・技術に関する理論と具体的な教育方法・技術を理解し、教育目標の実現に適した授業を設計し、実践できるようになることを目的としている。さらに、現在重視されている情報機器や多様な教育メディアを活用した授業を設計し、実践できるようになることも達成すべき目標として掲げられている。シラバスに示された授業概要は以下の通りである。

教育目標の達成のためには、適切な教育方法・技術が不可欠である。本講義では、学習指導理

論、教育評価論等の観点をふまえて、学習意欲・動機付けやメタ認知、記憶の構造と機能等、教育方法・技術に関する幅広い理論を取り上げ、今後の社会を担う子どもたちに求められる資質・能力を育む教育方法・技術に関する理解を深めることを目的とする。なお、学校教員としての教育実践に必要な情報機器や多様な教育メディアの効果的な活用能力の獲得という点を考慮しつつ授業を展開する。講義に加えて、講義内容に関するグループワークを取り入れるので、授業への積極的な参加を期待する。

初等教育・中等教育の授業実践の中で重視されている「対話的・主体的で深い学び」は、高等教育の授業でも同様に実施が求められていることに加えて、教員になり学校で授業を行う際に求められる授業実践を展開できるように、本授業では「対話的・主体的で深い学び」を学生が経験し、理解できるよう計画されている。

例年の授業において、講義がメインとなる授業回では、発問を多く取り入れることで学生との対話を重ね、さらに、グループごとにディスカッションをしてもらい、その後に話し合った内容に関する発表をしてもらうなど、学生が授業に積極的に参加できるように工夫をしている。また、授業内容をふまえた上でグループごとにパワーポイントを活用して教材を作成してもらい、その教材に関する発表をってもらう機会を設けている。教員と学生が共にコミュニケーションを取りながら授業が展開できるような計画となっている。

しかしながら、2020年度の授業は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、例年のような授業を展開することができなかった。前期では、4月の時点で対面による授業を実施することができず、ポータルサイトのクラスプロフ

ファイル機能を用いたオンライン型の授業が実施された。授業で用いるパワーポイントに解説を加えて、PDF化し、それを資料として提示し、学生に学修してもらう。その学修をふまえた課題を出し、学生はクラスプロフィールに取り組んだ課題を提出するというかたちであった。ほとんどの授業で同じようなスタイルが採用されたのではないと思われる。新しい授業スタイルに学生も慣れなかったと思われるが、ほとんどの学生が授業で出された指示に従って、授業を受け、課題を提出することができていた。11回目の授業から対面で授業を再開したが、グループワークを取り入れることができず、教員による講義のみの授業が展開された。最終授業回で行われる期末試験の前に、オンラインで実施された授業回の内容を中心に勉強会を実施した。参加は任意であったため、参加した学生はそこまで多くはなく、授業内容に関する質疑応答というシンプルなスタイルであったが、有意義な学びの場であったと考える。後期は基本的に対面式で授業を実施した。もちろん、新型コロナウイルス感染症拡大状況が続く中での実施であったため、グループワークを取り入れて授業を展開することはできなかった。発問を投げかけ、できる限り学生とコミュニケーションを取ることを心がけたが、例年のように「主体的・対話的で深い学び」の要素を含む授業展開が困難な状況には変わらなかった。

オンラインで授業を行っていた際には、学生の様子を確認することが難しく、どこまで授業内容を理解しているのかを把握することが困難であった。対面で授業を行った後に質問をすることと比べて、クラスプロフィール上では、学生にとって質問しづらいのかもしれない。後期の授業では、学生が質問に来ることがしばしばあり、様子を見ながら授業を展開することがで

きた。一方、前期の授業では対面で授業を開始するまでは学生から質問を受けることがなかった。今後、ハイブリット型授業が継続することになった場合に、学生とのコミュニケーションを確保し、授業内容理解のサポートをどのように行なっていくかを考えていかなければならない。前期に実施した、授業外の勉強会や Teams 等を利用したライブ授業の機会を柔軟に設けながら、学生の様子を理解した上での授業展開が望まれる。

また、学生一人ひとりの通信環境が異なるために、前期のオンライン型授業では、より多くの学生が受講しやすい資料提示型を採用した。ただ、資料提示型の場合、どうしても教員から学生への一方的な授業になりやすく、学生の声

や授業内容の理解状況をふまえた授業を展開することが難しい。今後、様々な形態の授業や、授業時間外での学びのサポートを実施するために、たとえば、大学における wi-fi 環境を整備し、学生全員がパソコン一台を所有できるための取組みを実施することが肝要であろう。さらに、オンライン型授業を通して、学生の情報活用能力に大きな差があるが見えてきた。筆者が担当する授業だけでなく、多くの授業において、学生がスムーズにオンライン授業を受講できるように、情報処理の授業において、office365 やポータルサイト、Teams 等の使い方を共通の授業内容とすることも欠かせないのではない。